

社長の経営哲学の構築にお役立ちする

税理士法人 優和

# 経営者への活きた言葉

TEL 0 3 - 3 4 5 5 - 6 6 6 6  
FAX 0 3 - 3 4 5 5 - 7 7 7 7

## 経営者への活きた言葉

### 同族経営でもめない絶対条件とは（「虎屋」に感銘）

ローレン・コーエン（ハーバードビジネススクール教授）

- 22年4月にエグゼクティブ講座「ファミリーオフィス・ウェルスマネジメント」で虎屋の事例を教えました。とても好評でした。特に虎屋の18代当主、黒川光晴氏との質疑応答です。受講者は皆、光晴氏が「500年企業の18代当主である」という事実に驚嘆し、次から次へと質問していました。
- 私が特に感銘を受けたのは光博氏（17代当主）とのインタビューです。生涯をかけて築き上げたものを次世代の後継者に譲る。その結果、自分が選んだ後継者が自分と異なる決断をして会社を変えていこうとする。こうした状況を目の当たりにしながら、口を出さないでいるのはとても難しいことです。
- 私はこれまでさまざまなファミリービジネスを研究する中で、先代が再び経営者に返り咲こうとしたり、敵対的な買収を仕掛けて現経営者を追い出そうとしたりした事例をたくさん見てきました。新しい経営者の就任後、決まってもめ事になるのは、前任者の介入です。それほど、創業家出身の経営者が潔く引退するのは難しいことなのです。

（参考：「週刊ダイヤモンド」2022年7月30日号）

## 人事・労務について

### 「しあわせは涙のあとに届くもの」

- 「しあわせ」は、「仕合わせ」とも「幸せ」とも書かれます。「仕合わせ」という言葉が使われるようになったのは室町時代で、良きにつけ悪しきにつけ「巡り合わせ」を語源とするといわれます。それが江戸時代に至って、幸運な事態を「仕合わせ」と言い始めたようですが、定かではありません。一方の「幸せ」という表記は、「幸」という漢字から変遷して用いられようになったとも聞きます。
- ノートルダム修道会のシスター、ジャンヌ・ボッセさんは著書の中で、「悲しいことやつらいことがあっても、そのあとにしあわせはやってくるのです。泣いて過ごす日があっても、それがずっと続くわけではないのです。しあわせは、涙のあとにきって届くのですから」（「しあわせは涙のあとに届くもの」）と述べておられます。「しあわせ」は、その人その人の心の持ちようで決まる、と私は信じています。

（参考：「致知」2022年9月号）

## 新規成長分野

### 日本の技術力の有望な分野

佐藤 一郎（国立情報学研究所教授）

- 日本のICT（情報通信技術）は20年間で世界に水をあげられた。企業がICT設備への大型投資をためらい、ハードウェア面での差がついた。ソフトウェアでは企業が製品・サービスの差別化要素と捉えられず、伸びなかった。ICT業界は多重下請けの構造で、イノベーションを誘発する体制がなかったことも挙げられるだろう。
- それでも世界で稼ぐ技術を磨ける可能性はまだあると考えている。期待されるのは「法や制度」そのものの輸出だ。例えば、健康診断による検査と早期治療に大きな市場があったからだ。このため、健康診断制度を輸出できれば、関連した技術やサービスの舞台は海外で広がる。「母子手帳」制度も輸出できれば、日本の新生児・乳幼児向けの産業が世界で活躍できる。

（参考：「日経ビジネス」2022年7月18日号）

## 古典に学ぶ

### 昔は、人道の大義を教えた

（解説）要するに、青年は良師に接して自己を陶冶しなければならぬ。昔の学問と今の学問を比較して見ると、昔は心の学問を専一にしたが、現在は智識を得ることにのみ力を注いでいる。昔は精神修養を説いている。修身齊家と言ひ、治国平天下と言ひ、人道の大義を教えたものだ。

（参考：渋沢栄一「論語と算盤」：国書刊行会）